

エドガー・ドガのアメリカ滞在

——《階段の子どもたち(ニューオリンズ)》に見られる黒人観

武笠 麻里子 (一橋大学)

エドガー・ドガ(1834-1917)は1872年の秋から翌年の春にかけて、13歳で亡くした母親の郷里であるアメリカのニューオリンズに滞在した。彼の叔父や弟がその地で綿花取引業に従事しており、パリから彼らを訪問したのである。現地で彼は、絵画《階段の子どもたち(ニューオリンズ)》(1872-73)を制作した。本作は、ドガがおそらくアメリカで初めて接した黒人を描いた唯一の絵画で、彼にとって珍しい画題である。本発表では、アメリカ黒人奴隷制と不可分の関係にあったドガの家族史および書簡の分析という方法で、彼の黒人観を紐解いていく。

群像を描いた本作で彼は、黒人女性が白人の子どもたちの子守りをする姿を写し取った。数少ない先行研究では、その子どもたちは彼の姪や甥であると言われている。ドガのアメリカの家族は、奴隷解放前は黒人奴隷を所有していた。彼の訪問時は南北戦争終結の約7年後であったが、アメリカの家族の綿花取引業は時世の変化と南北戦争によって衰退を免れなかった。会社はこの作品が制作されたのち破産し、叔父と弟は白人至上主義組織「ホワイト・リーグ」に身を投じていく。

ドガは渡米当初、彼の家族史と手紙の文面から察するに、黒人たちに対して否定的なイメージを持っていた。おそらくは彼らに対する差別感から黒人という画題に、忌避感に近いものを抱いていたのだろう。しかし、その後彼の黒人に対する認識は変わり、本作が描かれる頃には彼女達が白人に仕える姿は魅力的に映るようになった。彼はパリの友人にニューオリンズから書き送った書簡の5通のうち4通に、黒人女性と白人の子どもが共にいる光景を繰り返し賞賛している。その光景と合致するのが、本作である。また線描を得意としたドガは、書簡によると、黒人たちの身体の輪郭に惹かれ、その姿をデッサンすることに関心を持った。黒人女性の母親的役割に魅力を感じ、弟ルネの家庭への憧れもあって自身の結婚観のゆらぎも吐露した。彼は自身の黒人女性に対するイメージの急な変化に戸惑っていたのだろう。

ドガはその後、二度とアメリカを訪問しなかったが、後年かの地の黒人男性を痛烈に風刺して語るのを画商ヴォラールが回顧しており、その証言から彼が黒人男性を嘲笑していた様子がうかがえる。一方で、彼は献身的に映る黒人女性を好ましく感じていた。《階段の子どもたち(ニューオリンズ)》は、乳母を描くことで、アメリカ南部で失われつつあった白人中心の伝統を垣間見せる作品と解釈される。ドガはアメリカ滞在中、自身の揺れ動く黒人観に戸惑いつつ、この絵に黒人女性像を加えた。もっとも、彼自身も家族の経済が目下、破綻に向かっているとわかっていながら本作を描いているはずだ。これらをふまえると、以下の結論が導き出される。すなわち、ドガは彼にとって幸福なこの愛すべき情景をせめて画布にとどめておこうとしたのである。